

「酒屋」について

豊竹山城少掾／談

茶谷 半次郎／記

〈『山城少掾聞書』和敬書店、昭和24年8月〉

……「酒屋」もやはり私のは、陰気で面白くないといわれてるだろうと思っています。自分としても進んでやりたいものではありませんし、従って、はたの人のあまり深くは存じません。——が、私は「酒屋」は、なにも美声にものをいわしてやるにかぎったものじゃないと思っております。むしろ声のある人のやる浄瑠璃じゃないとさえ思ってるくらいです。賑やかな節が付いているからといって、それに躰いて行ったんじゃないんです。

酒屋が、よい声でないとやれないものに思われるようになったのは、近世になって織太夫の綱太夫さん（六代目）がやられてからで、この方は左官の綱太夫といわれた、イナセな江戸っ子で、軀中に刺青をしていられたそうですが、美声で鳴らした方だったんです。

だいたい只今伝わっております「酒屋」の型は、天保の頃、世話物の名人だった靱太夫さんが手がけられて、いろいろ工夫された型が土台になっているので、初代の古靱さんもお得意になすっていられます。また美声で売出してられたその綱太夫さんが誰よりも古靱さんを怖がっていられたといえますから、綱太夫さんの語り口も、ただ美音いっぽうのものではなかったことが想像されます。

「酒屋」は「艶容女舞衣」の「上汐町之段」の「切」で、初演は安永元年十二月豊竹座、豊竹嶋太夫さんの語り場ですが、その後は文化五年に猪熊の綱太夫さんがやられるまで、上演が打絶えております。半兵衛の咳は、この綱太夫さんの工夫でして、正本にはないのです。この綱太夫さんが三度、四代目の綱太夫さんが、むら太夫時代に一度やっておりますが、それからまた天保に靱太夫さんがやられるまで、長いあいだ上演が絶えております。それだけ難曲とされていたんだと思います。「酒屋」がたびたび上演されるようになったのは、靱太夫さん以後のことなんです。

私もことし（昭和二十一年）は、四月に南座、五月に文楽座と、つづきに「酒屋」を出しましたが、「酒屋」をやるのは十六年振でした。

……いつもきまり文句を申すようですが、この浄瑠璃も、本来陰気な浄瑠璃で、それを引立てるために、三味線は派手な節付になっているんで、けして三味線に躰いて派手に語ってよいものではないのです。だいたい綱太夫風というものがそうなんだそうです。しみりと情愛を語るのが本意で、したがって詞でも地合でも、間まというものをよほど大事にしなけりゃならない浄瑠璃と思います。だいたい宗岸と半兵衛の浄瑠璃で、わけて宗岸の娘不憫の親心を、シッカリと掴んで離さぬようにしなければなりません。宗岸がシテです。お園はいくぶん色気を持たしますが、これも、うら寂しいその境遇を忘れぬよう、じゅうぶん引締めて語らねばなりません。

〴〵こそは入相の、鐘に散り行く花よりも、あたら盛りを独寝の、お園を連れててておや翁親が、

世間構はぬ十徳に、丸い天窓^{あたま}の光さへ、子故に暗む黄昏時——

マクラの「こそは入相の、鐘に散り行く」は霞んだ遠音の鐘の気味合い、それからあとは宗岸の地合でやります。……若い身空で、嫁かず後家のような淋しい娘の身の上を、沁沁いとおしむ父親の心持でここをやります。「子故のくらむ、ツン……」で我れに返り、気を替えて「たそがれ時」をいいます。

〴〵主の妻は灯をともし、表を締めにいそいそと、出会頭に、詞ホ、是は是は宗岸様……

ホッと間を持って、宗岸のうしろを透かして見るところで「そちらにみやるは……オ、お園じやないか」「アイ、母様……」とまでは姑の詞について、懐かしさに何心なくいってしまってから、心づいて詞の調子を改め、「おかはりもござりませぬか」は、極りわるく伏眼になっていうところで申します。

〴〵宗岸は遠慮なく、詞半兵衛殿お宿にか、

これは奥を覗き込んでいうんです。

〴〵それと聞くより半兵衛は、一間を出る渋々顔、詞娘を連れていなれたからは、こちらの内に用はない筈。何のためにござつた事と、針持つ詞に妻は気の毒、

半兵衛は肚じゃ泣いているんで、なにもかも噛み分けていて、うわべだけ邪慳を装うているんですから、その肚を忘れないで、詞がキツクなり過ぎないように気をつけねばなりません。内心では、えらいところに戻ってきたなア……と思ってる気持ちを、詞にわざと針を持たして「なんのためにござつた事」といっているんです。本当に怒ってるような調子になっちゃいけないんです。

「ア、コレおやぢどん」と半兵衛を押えておいて、宗岸に、「ホ、ハ、ハ、イヤもふ、人様に追従いはぬ偏屈なちの人」この姑の詞は、半兵衛の肚を知らないんですから、ただ何気なしに申します。

〴〵詞ナンノ、ナンノ、半兵衛殿の立腹は皆尤も——

宗岸は、娘が可愛さにどこまでも謝まる気持なんです。「ナンノ、ナンノ」は、ひとりで呑み込んでいうんで、これからあとの宗岸の詞は、すべて独言の気持で申します。

〴〵唐も倭も、一旦嫁にやつた娘、嫌はれふがどうせふが、男の方から追ひ出すまで、取戻すといふ理屈はない筈、コリヤ宗岸が一生の仕損ひと、悔んでも跡の祭り——

ここで思入れの間を持って、娘のほうを見て、

〴〵詞お園めも昼夜泣き悲しみ、朝夕も勸まねば若や病ひが起らうかと、見てゐる親の心は闇——

この「心は闇」を掴まえて、じゅうぶんに応えさせなくちゃなりません。しかし、あとに「是まで泣かぬ宗岸が」が控えていますので、ここで泣いちゃいけないんです。肚で泣いてこらえているその心持に、グッと引寄せなくちゃなりません。——すべて、このあいだの宗岸の詞は、詞の合間合間の心入れをよく考えてやります。

〴〵詞何彼のことは了簡して、今まで通り嫁じやと思ふて下され。コレ頼んます。頼んます御夫婦と——

「嫁……じや……と思ふて」は愧じていい洩るのですが、ここを顔を見ながらやる人もありますが、私は「頼んます。頼んます」までは頭を下げていいまして、「御夫婦」ではじめて顔を見ることにしています。

それから「園もうぢうち手を支へ」ですが、

〱園もうぢうち手を支へ。爺様の一徹で、無理に連れられ帰りしが、一旦殿御と極つた半七さん、嫌はれるは皆わたしが不調法。鈍に生れた此身の科——

の「鈍に生れた」を、たいていは、チチチン……と弾かして「ギン」へにじらしています。なかには「この身のとが」を節で高くやる人もあります。私は、チチーン、と「ウレイ」のツボで受けて貰って「どーん——」とだけ高くやりまして、あとは「ウレイ」に落します。ちょっとスツて「このみのとが」は詞でやります。……こんなところで「待ってました」なんて声がかかったりしちゃ、まるッきり台無しですよ。

〱詞オ、何のマア、そつちさへ其心なら、こつちは変らぬ嫁姑。

と半兵衛のほうを見て、

〱詞ノウ親爺殿さうじやないか。イヤさうじやない——

この半兵衛の「さうじやない」が、先代大隅さんは口調がいかにも自然で、よかったこと無類でした。「イヤ」は申しません。

〱詞オ、其腹立ちは尤も尤も、が重々の不調法は、この天窓に免じて了簡して——

「コ、コ、コノ天窓に免じて……」と、宗岸は帽子をとって、坊主頭に手をやるのですが、昨年でしたか松島家さん（我當）が、宗岸を演られるについて話を聞きに見えた時も、ここはお詫びに天窓を剃ってきたと考えられないか、といわれましたが、私はそう考えなくていいと思うんです。日頃からの法体と考えていいだろうと思うんです。そうでないと、することが少しわざとらしくなりますからね。

〱詞忝めは勘当したれば、嫁といふべき者もない筈。サア夫も懲しめの為当座の勘当。イヤ当座でない。七生までの勘当じや。

「フーム」と宗岸の不審の思い入れがあつて、

〱其又七生まで勘当した半七が替りに、こなたは——

ここでまた間を持ちます。

〱なんで縄かゝつた。ヤア。サア半七とは親でも子でもないこなたが、今日代官所で…
…

また間を持って、

〱なんの為に縛られて戻らしやつたと、思ひも寄らぬ宗岸が、詞に悔り驚く女房、嫁も俱々立ち寄つて、肌押脱せば半兵衛が、小手を緩めし羽搔締——

このあいだの宗岸の詞は、半兵衛の本心を知つての上のことなんですから、詰問するような角立った調子になっちゃいけません。宗岸は親の了簡というものに、内心スツカリ屈服しているんです。これを忘れちゃ宗岸になりません。

半兵衛は縛られているんですが、これはべつだんどうとって語り現わしようがありません

せん。ただ手が自由に動かないのだということを、忘れないようにしております。

「詞イヤまだ驚くことがある。聳の半七は人殺し、お尋ね者になつたわいなのと、「お尋ね者になつたわいの」は宗岸が自分でに独りで、途方に暮れる気持で申します。

「夫は何故どうした訳、様子を聞かしてコレコレ半兵衛殿と、問へども更に返答は、差俯いて詞なし。

「問へども」は女房の地合、チン、という合の手は入れないで「さらに——」から半兵衛の地合に替ります。「とへども、ム、さらーにィへんと——オは、ジャン、さしうつむいて」「さしうつむいて」はジーツと押えていきます。

これからあとの宗岸の述懐も、やはり独りでいっている気持です。

「詞思へば思へば不孝者。

は本当に不孝者と思ひ込んでの詞。

「よい時に勘当さしやつて、親に難儀のかゝらぬは、まだ此上の仕合と、で間を持って、

「思ふた他人の了簡……

で我れに返るんです。

「人殺しの科を身に引受け、縄かゝつたこなたの心は、真実心に子を思ふ、親の誠と知れば知る程……

で、じゅうぶんに思い入れをしまして、

「宗岸が仕損ひ……

と肚の底から慨嘆いたします。

「一旦嫁におこしたれば、半七が厭がるなら、ハテ……

と、ウレイになって、

「尼にしてなと此内で、御夫婦の亡きあとの、香花なり共取らして下され。コレ手を合して頼みます。

で、頭を下げ、間を持って、また述懐になり、

「詫言が叶はねば、引離されたと突き詰めて、短慮な心も出しおろかど、案じ過して夜の目も合はず。ア、ア、母親は無し。たつた一人……

で、いとし気にジッと娘を見やるところで、

「あいつを思ふおれが因果。

をいいます。

「おれもこなた程はなけれ共、

ギューツと押え、肺腑を絞って「娘はかわ——いゝ……」

「まして勘当はせぬ娘。愚痴など人が笑はふが、

「おれや、かはい……」と大きくいい放し、じゅうぶんにウレイを含んで「不便にござるわいのふ……」と、ここではじめて宗岸が泣くんです。ここは堰を切った「こたへにこたへし溜めだめを、たくし掛けたる叫び泣き」なんですから、手放しで、大泣きに泣きます。それ

に誘われて、半兵衛も本心を割って、

〽詞オ、道理じや道理じや宗岸殿と。跡は詞もないじやくり。

となるのですが、ここを「なアいい」で、シューツと三のスリ込みを入れて、「ヤ、オ、イ、じやくりウウウリ」と売りに行く人がありますが、それだと「じやくり」になります。

私は、チンチン、チン、チン、チン……と「なア、いい、じやくウ……」までつづけていって、ここでスリ込みを入れて「ウウウリ」とやっております。——スリ込みを入れない手もあります。

〽半兵衛涙の内よりも、持病の啖に咳き入つて、

は院本には「持病——」のところが「お園が顔を打守り」となっていて咳はないのですが、ここで咳をやります。それから「世間の人の嫁鑑」でまた咳、

〽詞此方へ置けば此儘若後家。おりやそれが可愛い。いとしうおじやる。

「それが可愛い」からまた咳を交ぜます。ここの咳の交じる詞に、半兵衛の嫁をいとしがうレイの情愛を語ります。それから、

〽詞一人の悴はお尋ね者。あすより誰を力にせうぞ。孝行にしたもつたが、今では結局恨めしいと、

と、述懐のあとの

〽せき上げせき入る舅のせな。

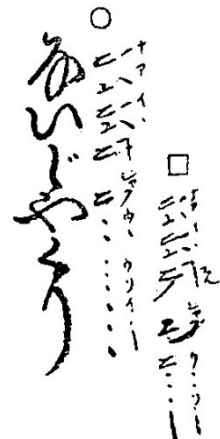
の「せき上げ」のあとが、ゴホン、チン、ゴホン、チン、ゴホン、チン、……と咳を交ぜた手になっております。

お園を一人残して、三人が悄悄奥へ這入ったあとが、ご存じのお園の一人クドキ「跡には園が憂き思ひ」になるのですが、私はだいたいこれまでの宗岸と半兵衛を掴まえて「酒屋」を語っておりますので、クドキは目当てじゃないんです。この浄瑠璃では、詞と心と裏腹な半兵衛も難物ですが、なんといっても宗岸の情合ですよ。私も宗岸を娛しんで語ります。クドキは当て込んだりしないで、せいぜい引締めて、お園の遣り場のない淋しい心情に、一日でもいいから、泣いて貰うように語りたくと心懸けております。しかし、自分でもここではまだ泣ききれないんですから、これは無理な望みかも知れませんがね。いったいが泣きべそで、床でお客さまそっちのけの、自分で胸が迫ってきたり、泣けてきたりはしょっちゅうで、「酒屋」でも宗岸をやってますと、ひとりでに涙がこぼれてまいりますよ。

ここのクドキの節はみな「ギン」へにじらしますが、「ギン」の遣い方に気をつけなけりゃならんと思います。

〽思へば思へばこの園が、

でも、私は三味線は「ギン」で、チン……と受けて貰っておいて、「この……」と下から忍んで出て「ギン」へ音を持って行くようにしております。ここの節数は、大掾師匠のでも



(○は山城師の節、□は、いうところの「ない」と「じやくり」が切離された節)

そんなに多くありませんでした。四代目の^{めくら}旨の住太夫さんなんか、
 ^この——オ、そオのオ、が、

これだけだったそうで、それがまた大変によかったそうです。私はもう
 少し延ばしてやっております。

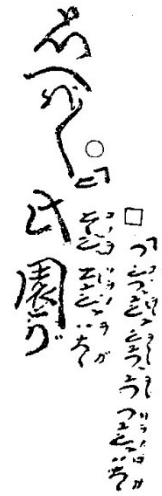
お園のクドキのあと、段切まではサラサラ運びます。半七の書置を四人
 に替りがわりに読ましたり、隣の地唄を聴かしたりしてあるのも、ダレ
 させないための作者の用意なんだろうと思いますが、それでも、わるくす
 ると、ここはダレやすいんです。しかし、サラサラ運ぶうちにも、もちろ
 ん要所々々は押えます。それに、半兵衛と宗岸の泣き声がゴツチャになら
 ないように気をつけねばなりません。詞もそのとおりですが、宗岸はいく
 らか甲高に、半兵衛は低い目な、これは啖声でやります。人形の頭^{かしら}も宗
 岸は「定之進」（新口村の孫右衛門、質店の太郎兵衛等に用いる）、半兵衛
 は「鬼一」（「舅」を用いることもある）を使っています。

「未来は必ず夫婦にて候」で、お園が「オ、是やまア誠かいなア半七さ
 ん。ほんまの事でござんすかいなア……」と泣き入るところなんかも、おほこな、女らしい
 情合がなけりゃなりません。要するに情を疎そかにせずにサラサラ運ぶのですが、これはな
 にも「酒屋」にかぎったことではなく、たいていの浄瑠璃のしまいはそうになっているん
 ですが、「酒屋」は殊更そうやらないと寝入ってしまいます。

^見れども親子隔ての関。何と千万無量の想ひ。

ここは表に忍んでいる三勝と半七が、血を吐く思いで、よそながら親と子に一世の名残り
 を惜しむところなんだから、ここをもっと掴まえてやれと、ことしもいわれましたが、前の
 ほうで掴まえすぎるほど掴まえてやっていますので、私はこの辺りはやはり掟どおり三味
 線に渡してサラリと運びたいんです。

……十六年前には、まだいい声でやるもの、自分の柄にないものという考えが抜けなかつ
 たので、どうも、いい気持ちでやれませんでした。でなけりゃ、いくらなんでもその後二度
 や三度は出している筈です。昭和六年の夏、東京で松太郎師匠に稽古して貰ったんです。…
 …今日では私は浄瑠璃は節ではなく、詞だと思っています。申すなら、しがんだみみたいな
 声で、情で聴かす——そんな浄瑠璃が語りたと思いますよ。



（○は山城師の
 節、□は、普通に
 多く用いられる
 派手やかな節）